魔法戦記リリカルなのはBLAZBLUE

生粋の名無し

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自身に関する記憶と存在を引き換えに、一人の少女と数多の可能性を救った『死神』ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジ。

世界から消滅したはずの彼が目を覚ますと、そこは――

――これは『蒼の男』である彼が、悲しき運命を背負う少女達をなんだかんだ救う物語――

※これは両クロスオーバーもとの作品知識にわかの作者が作った作品です。もしこの作品を読んでいる方の中に、ＢＬＡＺＢＬＵＥファン、リリカルなのはファンの人がいらっしゃれば、忖度の無い評価と感想をお願いします。

※タイトルを仮名から変更しました。

※「このキャラのこの台詞がおかしい！」「このキャラはこんな喋り方しない！」というところがあれば、感想欄かメッセージで教えて下さい。（なお、メッセージで送る際はどう変えればいいか等を教えていただければ幸いです）

目　次

無印開始前
プロローグ ―――――――――――――― 1
第一話　新たな人生 ―――――――――――― 7
第二話　喫茶店 ―――――――――――――― 17

無印開始前
プロローグ

そこは、地面と空の境界すら分からないほど真っ白で――しかし見上げれば、雲の隙間から青い空が見える静かな空間。その空間に唯一存在する物体――複雑な紋様が描かれた巨大な門へと向け、一人の男が歩いていた。

男が門へと近づくと、門の前に誰かが立っていることに気づく。

そこにいたのは、結い上げた青紫の長い髪が目立ち桜色の派手な着物を着崩すように身に纏った、歌舞伎に出てくる女形のような青年。

彼の名は『アマネ＝ニシキ』。彼らのいる世界を異なる視点から見守る存在――『傍観者』と呼ばれる者だ。

「あんたか…」

「――見せてもらったよ、『お前さん』の舞。見事だったよ」

「そうかよ…」

話しかけてくるアマネに対し、彼の言葉の意味をいまいち理解できていない男は呆れた様子で答える。そんな男に、アマネはここに来た理由である情報を伝える。

「安心しな。〝タカマガハラシステム〟に『お前さん』の情報は何も残っていないよ」

「――手間かけさせたな」

「良いってことよ！見事な舞の礼さ」

満足そうな顔で答えるアマネに、男は少しだけ笑みを浮かべ――すぐに真剣な眼差しを向ける。

「――なら後はあんただけだな。『傍観者』」

そう言って男は、見せびらかすようにして自らの右手を持ち上げる。

「まったく残念な話だよ！あれ程の舞を記憶に留めておけないなんてね…『遍（あまね）』の名が泣くよ…それで、『お前さん』はこれからどうするんだい？」

少し残念そうな表情を浮かべたアマネだったが、すぐに真剣な表情へと変化させると男にそう問いかける。
すると男は、穏やかな顔で答えた。
「みんなの『願望(ゆめ)』を、〝蒼〟へと還す。そこから生まれる世界は誰の――アマテラスにもタカマガハラにも干渉を受けない――あいつらの世界だ」
男はそう答えながら、自らの右手を見つめる。
男の右手――正確に言えば、右腕を象っている魔道書――には、他者の生命力を吸収し、宿主に無尽蔵の魔力と生命力をもたらす能力を持っているのだが、力を上手く操作することで、他者の『記憶』を喰らうこともできるのだ。
男はその特性を利用し、ここに来るまでに多くの人々の記憶――『願望(ゆめ)』をその右手に喰らわせてきたが――限界を迎えようとしていた。
元々この魔道書は男が最初から持っていたものではない。とある理由で右腕を失った男に、後付けで取り付けられたものなのだ。
いくら無尽蔵に魔力や生命力が増やされようとも、器である宿主の許容量(キャパシティ)を越えれば、あぶれた力は暴走し、宿主の身体を蝕んでいく。数多の人の『生命力(願望)』を溜め込むとなれば、瞬く間に許容量の限界が来ることは説明せずとも分かることだ。
実は服で見えてはいないが、既に男の右半身は魔道書に侵食されて漆黒に染まっており、アマネと話している間にも右目から瘴気が漏れだしている。
「過去、現在、未来に、あまねく広がる『可能性』という名の希望――これ程大規模な世界の再構築は見たことが無いよ…これが真なる蒼――『蒼炎の書(ブレイブルー)』の力かい…」
呆れたような、感心したような声音でこぼしたアマネの言葉に、男は頭(かぶり)を横に降る。
「違うよ。俺の力でも、蒼の力でもない――あいつらの『可能性(ちから)』だ」
男が笑みを浮かべながら答えると、巨大な門がゆっくりと開き、まばゆい光が彼らを包み込む。

それから数秒後、門が閉じて光がおさまると、先程までいた男達はすでにおらず、その場に残されたのは一振の大剣のみ。
こうして、蒼の男――『ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジ』は、その世界から存在（すがた）を消した。

「――ん、んぅ…？」
肌を撫でる優しい風と鳥のさえずりに、1人の少年が目を覚ます。
目を覚ました少年が最初に見たのは、年代を感じさせながらも綺麗に清掃された木製の天井。少年は少しの間、どこか懐かしく感じるその天井を眺めると、ゆっくりと身体を起こす。
彼のいた部屋は、白を基調とした壁に囲まれており、置かれていた家具は木製の勉強机とクローゼット、壁に取り付けられた暖炉に自分が眠っていたベッドだけと、いたってシンプルな備え付けだ。
机の隣には開かれた窓があり、そこから外の風と優しい日の光が差し込み、白いカーテンが風に揺らされている。
「ここは…シスターの、教会か…？」
目を覚ました少年は、寝惚けた頭で見覚えのあるその景色を眺めて

――そして意識を急速に覚醒させていく。
（何がどうなっていやがる！――オレは確かに、あの門を通って”蒼”に接続して、オレの持つ魔道書の中で精錬した皆の『願望（ゆめ）』を還した。それでオレは世界から――オレという存在は消えたはずだ！なのに何で――よりにもよって――あの日燃え尽きた教会（存在しねえはずの場所）にいやがんだ！）
　完全に目を覚ました少年――ラグナは、あまりにも理解しがたい状況に片手で頭を抱え――そこでようやく違和感に気づく。
（なんかオレ、背ぇちっちゃくねぇか？）
　一般の男性と比べて高身長であったはずの彼の視点が、妙にベッドと近く感じる。さらには――半袖の先から見えている右腕を見て、ラグナは驚愕する。
（『蒼炎の書（ブレイブルー）』が、無（ね）え!?）
　今の彼の右腕は、失くなった腕の代わりとなっていた魔道書の漆黒ではなく、白みがかった肌色をしていたのだ。
　しかもよくみれば、その右腕はかすり傷一つなく筋肉も未発達な状態。幾度の死線を越えてきた者の腕とは到底思えない。そして何より――大人というにはあまりにも腕の長さ（リーチ）が短すぎる。
（もしかしてオレ、縮んじまってる!?）
　そう――１８５ｃｍ（センチ）あったはずの彼の体は、なぜか幼少期の――教会で暮らし始めた頃の身長まで縮んでいたのだ。
　あまりの出来事に理解が追い付かないラグナだったが、そこで突如、彼の頭の中に一つの仮説が浮かぶ。

「今までのことは全部、オレが見てた夢だったってのか…？」

　今までのことは全部夢で、今のこの状況こそが現実。それならば説明がつくかもしれない。
　しかしラグナは、すぐにその可能性を否定した。

人一人が一夜でみる夢にしてはあまりにも物語が広大すぎるし――なにより彼自身が、あれが夢だと思いたくなかったのだ。
（つっても、このまんまベッドの上で考えてるだけじゃ、なにも分かりはしねぇよな）
ラグナは一度考えるのをやめると、ベッドから降りて部屋の中を散策してみる。
学習机の上を見れば、昔は全く理解することができなかった見覚えのある表紙の本がいくつも立てられており、窓縁から外を眺めれば、木苺採りや水汲みなどでいつも通っていた教会の玄関へと続く土の道が少しだけ見え、その道の両端に生えた草原と奥に見える木々の葉が風で揺れている。
（――ホント、懐かしいっつーか…あの頃と変わらねーていうか）
そんなことを思いながら、最後に残ったクローゼットに手を伸ばし――ギリギリのところで取っ手を掴み、ゆっくり戸を開くと、目の前に何やら四角いものが落ちてきた。
「うおっと！」
いきなりのことにラグナは驚きつつも、素早い反射神経で落下してきたものをキャッチする。
ラグナが掴んだ拳大の物体は、クローゼットの内側などに取り付けられている小型の鏡だった。どうやら立て付けが悪かったところを、ラグナが開いたことで外れたらしい。
無事受け止められたことに安堵の息をついたラグナ――だったが、その鏡に映ったものをみた瞬間、時が止まったかのように固まった。
鏡に映ったのは勿論、ラグナ自身。しかしそこには、弟妹と同じ金髪緑眼――ではなく。

まるで色素が抜け落ちたような真っ白な髪に、左目が翠色で右目が緋色のヘテロクロミア――つまり、彼が魔道書を移植された後の外観だったのだ。

誰に認識されることもなく、大切な人達を護るために一人孤独に世界を救った『全世界の敵』ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジ。

新たな生を得た彼は、この世界の『敵』となるか、はたまた『英雄』となるか、それとも――『勇者』となるか。

第一話　新たな人生

「なんなんだよ…訳わかんねぇ…」
　右手に掴んでいた鏡を机の上に置いたラグナは、ベッドに腰かけると苛立たしげに頭をかきむしる。
　鏡に映った自分をみた直後は、混乱した挙げ句「なんじゃこりゃあぁぁぁぁ!?」と叫びかけたが、何とか声を飲み込み、代わりに今のような状況に至っていた。
（まさか、『蒼の繭（エンブリオ）』の中か――いや、それはありえねぇ。確か『蒼の繭』は、大勢の人間の魂を使って『蒼』へと干渉し、『蒼炎の書』を生み出すための『窯』のような存在だったハズだ。ならあの時――俺が『蒼の境界線』へとたどり着き、『蒼の魔道書』が『蒼炎の書』になったことでその役目は終えている。――ならここは、一体何処なんだ…？）
「ハァ…一体どうなってやがんだ…」
　お手上げとばかりにベッドに仰向けで倒れ、そんなことを呟いたラグナ。その直後――

「ラグナ、もう朝よー！」

　ノック音と共に、扉の向こうから聞き覚えのある――とても懐かしい声が聞こえてきた。

（『シスター』か！――いや、でも俺の知ってるシスターよりか声が若い気が――）
「ジン達はもう起きてるのよー！早く起きなさーい！」
「っ！」
　聞こえてきた女性の声にどこか違和感を感じたラグナだったが、彼

女が弟の名前をあげたのを聞き、急いでベッドから飛び降りると、扉のハンドルに手を掛ける。
「悪(わり)い、シスター。起きてはいたんだけど、ちょっと寝惚けててさ…」
そんな言い訳を話ながら扉を開くと――扉の先には、修道服を身に纏った一人の女性が立っていた。
そして顔を上げ――件のシスターの顔を確認したラグナは動きを止める。

自分の知っている彼女に比べると少しばかり大人びているが、そこにいた女性は紛れもなく――前世で災厄に対抗するために過去から引き上げられ、彼に戦う理由を与えてくれた――彼のことを『勇者』と呼んだ少女だったのだ。

（『セリカ』――！）
ベールの下から茶色の髪を覗かせる目の前の女性――『セリカ＝A＝マーキュリー』を見たラグナは驚くと共に、彼の中で全てが繋がる。
前世の彼の中にあった幼少期の記憶は、全てを失ったあの日以外朧気で、シスターの顔を思い出そうとしても常に彼女の目元に影がかかっていた。
だが前世のラグナは、戦いの最中彼女(セリカ)に様々な場面で、幾度となくシスターの面影を重ねていた。
更にいえば、前世でラグナの剣の師匠だった獣人――『獣兵衛』がラグナ達三人を教会に連れてきた時も、ラグナはシスターと初対面のハズなのに、シスターは何故か、最初からラグナのことを知ってるような口ぶりだった。
そして今、こうして目の前にいるセリカを見れば、記憶の中のシスターの顔から影が消え、目の前のシスター(セリカ)と記憶の中のセリカ(シスター)、その二人の顔が重なる。

――ラグナ自身、本当は薄々気づいていたのだ――

――自分達を育ててくれたシスターの正体は、セリカなのだということに――

「おはよう、ラグナ。――どうしたの？ボーッとしちゃって」
「っ――な、何でもねぇよ。まだ少し寝ぼけてるだけだ」
全てが繋がり、驚きと納得で感傷的になっていたラグナだったが、シスターに顔を覗き込まれたことに驚き、顔を背けて目元に力をいれる。
「大丈夫なの？兄さん…」
「！」
そして、顔を反らした視線の先には、金髪碧眼の少年少女――幼きラグナの弟妹達が、曲がり角から顔を出してこちらを覗いていた。
「だから大丈夫だって。――おはよう。『ジン』、『サヤ』」
「おはよう兄さん！」
「おはようございます、にいさま！」
二人をみたラグナが気分を切り替えてそう伝えると、弟（ジン）と妹（サヤ）が笑みを浮かべながら角から身を乗り出した。
なおその際、前世の弟を思い出したラグナは一瞬、「ニイサァン!!」と叫びながら危ない笑みを浮かべて襲いかかろうとするジンを幻視し身構えかけたが、屈託のない笑みを浮かべる彼を見て前世のジンではないことを理解し、内心安堵の息をついた。
するとその時――

「おっはよー！らぐなおにいちゃん！」
「ぐほぉ!?」

弟妹達の背後から現れた小さな影が、走って近寄ってきたかと思うと、ラグナに勢いよく飛び付いた。
その際、飛び付いてきた影の頭頂部がちょうどラグナの鳩尾付近へとぶつかり、痛みでバランスを崩したラグナは抱きつかれた勢いも相まってそのまま廊下に倒れる。
「いっつつ…」
倒れた際に頭もぶつけたのか、後頭部と胸元に残る鈍い痛みを我慢しながら、ラグナは自分の懐へ飛び込んできた影の正体を確認するために身体を起こす。
ラグナに突撃してきた影――先程の高い声から少女と思われる人物は、顔は彼の胸元に埋めているため確認できない。
だがラグナには、その少女の声に視界に入っている今の自分と同じ脱色されたかのような白髪、そして『ピンッ』とたったアホ毛に見覚えがあった――

「テメェ――『ν（ニュー）』か!?」

ラグナがその名を呼ぶと、抱きついていた少女が彼の胸元から顔を上げ――赤い瞳を輝かせながらパーッと笑顔の花を咲かせ、すぐにまた顔をラグナの胸元に埋めた。
そう――前世で幾度も刃を交え、一度は彼の手で命を奪った敵であり、そして最後には救おうとした少女――『ν（ニュー）―Ｎｏ（サー）．１３（ティーン）―』が、ラグナの胸元に抱きつき、まるで甘える猫のように頬を擦り付けていたのだ。
（てかちょっと待て。今、こいつ俺のこと「おにいちゃん」っったか!?）
「こーら！ニューったら、ラグナが困ってるでしょ？」
セリカがラグナに抱きついているニューに注意している横で、突然

のことに混乱しているラグナ。
しかも先ほどニューが発していた言葉が彼の戸惑いを加速させているなか、更なる追い討ちが彼を襲う。

「おはよう、ラグナにいさん」

三（ラグナとセリカとニュー）　人のやり取りを見てあわてふためく二（ジンとサヤ）人の背後から、これまた再び見覚えのある――顔つきや瞳の色、髪型までニューと全く同じで、しかし髪の色だけはジン達とお揃いの金髪の少女が現れたのだ。
（『Λ（ラムダ）』…テメェもかよ…！）
新たに姿を見せた少女――前世では身を呈する形でラグナの命を救い、彼に力を託して一度消滅した少女――『Λ（ラムダ）―Ｎｏ．１１（イレブン）―』が、先程のニューと同じく自分のことを『兄』と呼んだことで、ラグナの脳は限界を迎えようとしていた。
「ほーら！そんなにくっついてたら、ラグナが着替えられないでしょ？今日はこれからお出掛けなんだから、ラグナもおめかししないと！」
「あっ！――は～い…」
一気に押し寄せてきた情報を処理できず頭を抱えているラグナをよそに、セリカがラグナからニューを引き剥がす。その際、ラグナと離れたことに寂しそうな表情を浮かべたニューだったが、セリカの言葉を聞いて首根っこを捕まれた猫のように大人しくなる。
「あん？出かける…？」
「兄さん、忘れちゃったの？――昨日、この間シスターさんが見つけた喫茶店に行こうって、皆で約束してたじゃないか」
ニューが離れたことで一息つきつつも、セリカの話を聞いて首をかしげていたラグナに、近寄ってきたジンが答える。
「――あ…あー、そうだったな！悪い悪い、すっかり忘れてた」

「もう、兄さんったら…」
笑ってとぼけるラグナにジンがため息をつく。
そんな弟に苦笑を浮かべたラグナは、ゆっくり立ち上がり彼の頭を優しく撫でると、部屋へと戻り着替え始めた。

それから数分後、着替えを終わらせたラグナとシスター達は教会の前にいた。
そんなラグナの手には紙の地図が握られており、山の中腹付近及び町中と思われる場所の二ヶ所に赤い丸がつけられている。
「地図は持った、と…シスター、財布は？」
「はーい！ちゃんと持ってるよ」
「うっし！それじゃ、シスター。アンタは絶対、俺より先には行くなよ？ジン達より後にもだ。そんでジン。もしシスターが変な方角に行こうとしたら、全力で引き留めろ。いいな？」
「うん、わかった！」
ラグナの真剣な表情を見て、ジンが力強く頷く。
ラグナがそこまで真剣に言い聞かせているのには、理由がある。
――もし、本当に今ここにいるシスターが、自分の知るセリカであり記憶にあるシスターと同じ人物であるなら――彼女は途轍もない方向音痴のハズ――一秒でも目を離せば、いつの間にか視界の中から消え去るほどには。
「もう！ラグナは心配しすぎだよ。今から行く喫茶店はここからそこまで離れてないんだから、迷ったりしないよ」
「…これがアンタじゃなかったら、俺だってそう思うんだがな」
前にもしたことがあるやり取りをしながら、ラグナはシスター達の先頭をきって山を降り始める。
歩き始めてから更に数分後、まだ幼いサヤ達三姉妹に合わせて林の

中をゆっくりと歩いていると、ラグナが唐突にジンに問いかけた。
「…そういやジン。今って何年の何月だっけか？」
「え？どうしたの急に」
「いや…どうも寝惚けてるにしては、記憶が混乱しててな…寝てる時に頭でもぶつけたのかもな」
首をかしげるジンに、ラグナが頭をかきながらそう伝えると、ジンより速くシスターが食いついた。
「え!?大丈夫なの、ラグナ？どこも痛いところとかない？」
「だから、大丈夫だって言ってるだろ？――でも、もしそれでも心配だってんなら、これから俺がする質問に答えてくれねぇか？もしかしたら、混乱が収まるかも知れねぇからさ」
心配そうに頭に触れてくるシスターの手を、照れ臭そうにしながら軽く押し退けつつラグナはそう話す。
「うん、わかった！ラグナがそれでいいって言うなら、私、何でも答えるよ！」
「悪い、シスター。助かる…」
「僕も手伝うよ！まずは、今日がいつなのかだったよね？」
笑顔で賛同したシスターに頭を下げると、話を聞いていたジンも話に入ってきた。
そんな二人を騙すようなやり方に少し罪悪感を抱きながらも、ラグナは抱いている疑問を質問という形で問いかけ始める。

「すまねぇな、二人とも。少し思い出せてきた」
質問を始めてから更に数分後、ラグナはなんの疑問も抱かずに答えてくれたジンとシスターに礼をいうと、脳内で話を整理する。
（今は、２０００年の６月――場所は日本の海鳴市ってところらしい――俺とジン、サヤ…そして、ニューとラムダは血の繋がった兄妹で、

一年前にあの教会の前に捨てられていたところを、シスターが拾って今まで育ててくれていた、か…）

二人から聞いた話を纏めたラグナは、自分の中で一つの結論を見つける。

（もしかしたら、この世界は――俺が救った『可能性』の一つなのかも知れねぇな）

ラグナがそう考えた一番の理由は、年数だ。

前世のラグナが戦い抜いた世界、そこで彼が覚えている最後の西暦は――２２００年。つまり今、ラグナがいるこの世界とは２００年の差があるのだ。

一度、境界を通って過去の時代に飛んだのではないかと考えもしたが――それは、ある一つの情報によって打ち消される。

先ほどの質問の際、ラグナはもう一つ、あることを聞いていた。それは――『自分達の名前』。

当初、その質問をした際は二人からかなり心配をされたが、なんとか聞き出すことができた。

結果、自分のこの世界での本名が――『ラグナ＝マーキュリー』であること。

更に弟妹達も、当たり前ではあるがラグナと同じ名字で、そしてシスターの名前が――『セリカ＝Ａ＝マーキュリー』であることを知る。

（２００年も前に、同じ顔で同性同名の奴がいたなんて話、ありえるハズがねぇ。教会にしてもそうだ。――なら可能性としては――俺がいた世界によく似た、まったく別の世界――ってのが、可能性としては高（たけ）えだろうし、何よりその方が納得がいく）

そこまで考えたところで、ようやく林の中を抜け、海鳴市の景色が視界に広がる。

最初に目に写ったのは、人の手により舗装されたコンクリートの地面――その上を走り、目の前を通りすぎて行くいくつもの鉄の乗り物たち。

（確か、『自動車』ってやつだったか？）
ラグナは記憶の中に埋もれていた情報を引き出す。
前世では、移動手段に飛空艇が主流となっていたため、自動車やバイクなどはヴィンテージ品として、金持ち達の間で取引され、鑑賞用として扱われるのが殆どだった。
なので、前世で指名手配されて追われる身だった彼には縁がない存在で、噂に聞く程度だったが、初めてこうして実物を目にし、しかも実際に動いている所を見て、流石のラグナも興味を隠しきれず、行き交う車を目で追いかけてしまう。
次に視界に入ったのは、建物や人で活気づく海鳴市の町並み。
前世では、１００年前に現れた大災厄――『黒き獣』と呼ばれる存在によって、多くの土地は荒れ果ててしまい、その地から逃げるようにして人々は階層都市と呼ばれる物を作り、ほとんどの人類がそこで暮らしていた。
そのため、大地に数多の建物を築き、その地で多くの人々が過ごしている今の光景は、ラグナにはとても新鮮だった。
最後に写ったのは、雲一つない綺麗な青空と――太陽の光を反射して輝く美しい海。
前世の海は、『黒き獣』によってほとんどが消滅してしまい、世界中を旅してきたラグナすら目にすることはできなかった。
だが、この世界では海が当たり前のように存在している。
その景色は、ラグナに感動を与えると共に、彼の考えを確固たる物にさせた。
（本当に、違う世界に来ちまったんだな…）
「どうしたの？またボーッとしちゃって」
自分の世界や他の世界を救うために自らが招いた結果とはいえ、少し虚しい気分になっていたラグナだったが、シスターの声を聞いて我に戻り振り返る。
そこには、心配そうに見つめるシスターと、自分と同じように外の景色に瞳を輝かせる４人の弟妹達の姿があった。
「い、いや…ほら、海鳴市の風景を見るのって、俺達は初めてだと思う

からさ。ちょっと、感動して…」
心配して話しかけてきたシスターにそう伝えると、彼女は一瞬だけ気の抜けた顔を浮かべ、すぐに優しい微笑みに変えた。
「そっか…そうだよね。ラグナ達は一年前(あの日)から、ずっと教会にいたんだものね」
そう言ってシスターは、たった今下りてきた山の方向を見て「もう一年か…」と、懐かしむような表情で呟く。
だがすぐにその表情をやめると、今度は満面の笑顔を浮かべた。
「よし!じゃあ今日は、ラグナ達が初めて外に出たお祝いに、喫茶店でパーッと盛り上がっちゃおう!」
シスターはそう言うと、ラムダの手を引き、ラグナの忠告も忘れて海鳴市へ向けて歩き出す。
「あっ、おい!だから俺より先に行くんじゃねえって!」
そんな彼女に呆れつつも、ラグナとジンは妹の手を取り追いかけた。

第二話　喫茶店

「――あっ！見えてきたよ！この間見つけた喫茶店！」
「やっとか…」
「疲れたよ…」
　笑顔を浮かべるセリカの後ろで、ラグナとジンが荒い息を吐く。そんな彼らの背中には、ぐったりした表情の妹達の姿が。
　それも仕方がない――山を降りてからここにいたるまで、既に一時間もたっているのだから。
　――そう、一時間だ。本来であれば、３０分もあれば普通にたどり着けるはずの距離だったのだが…

　街中に入ってすぐに「あ、こっちの道が近道な気がする！」といって全く関係のない方向に歩き出したり、食べ物の匂いにつられて向かう先とは真逆の方へフラフラ歩いていったりと、シスターがとにかく寄り道をするせいで、予定の時間より大幅に遅れてしまったのだ。
　ちなみに妹三人は、まだ幼いこともあり、１０分経った頃には既に疲れきってしまって、それからずっとラグナ（ニュー）・ジン（サヤ）・シスター（ラムダ）に背負ってもらっていた。

（クソッ！山を降りる時は問題なかったからって、完全に油断した！やっぱシスター、俺の知ってるセリカと全く同じじゃねぇか！）
　自分が方向音痴であるとは１ミリも思っていないであろう満面の笑みを見せるシスター。
　そんな呆れるほどポジティブ思考の彼女に、思わず内心で怒声を上げたラグナだったが、すぐに落ち着くと、シスターの後ろを歩きながら店の看板に目をやる。
　今の世界に転生したことで、自身も気づかぬうちに日本語を理解できるようになっていたラグナだが、流石に漢字を読むことはできな

かった。
しかし、その下にはローマ字も記入されており、そちらの方はラグナでも読むことができた。
（”ＭＩＤＯＲＩＹＡ”――『ミドリヤ』で、いいんだよな？）
ラグナが一人、その店の名前を頭で復唱している間に、シスターがそのお店――喫茶店『翠屋』のドアに手を掛ける。

「いらっしゃいませー！」
店に入ると、まず最初に店員の元気な声がラグナ達を出迎えた。
翠屋の内装はいたってシンプルで、席はテーブルとカウンターの二種類があり、木製のカウンターに挟まれるようにおかれたショーケースの中には、ショートケーキやシュークリーム等のメジャーな物から、ラグナの知らないスイーツまで複数並んでいる。店内は平日ということもあってか、そこまで人気（ひとけ）はないものの、各々が注文した料理に舌鼓をうっていた。
「綺麗なお店…」
テーブル席に案内されたシスターが一人呟くと、渡されたメニュー表をテーブルに広げてラグナ達にも見えるようにする。
ジンとサヤ達三姉妹、それとセリカがメニュー表に見いる中、ラグナだけはそちらに集中することができなかった。

前世の彼は、とある事情から『世界虚空情報統制機構』――通称『図書館』――と呼ばれる組織にＳＳ級犯罪者「死神」として指名手配されており、統制機構の衛士やら、「咎追い」と呼ばれる賞金首の捕縛・撃退を主とする者達やらに追われる日々を過ごしていたため、人の視線や気配には敏感になっていた。

だからこそ、現在進行形で自分達に向けられている周囲の視線はラ

グナにとって煩わしかった。
この翠屋に向かっている時にも感じていたソレは好奇の目。
白髪にヘテロクロミアという浮世離れした容姿のラグナにも何人かは視線を向けていたが、ほとんどの人はシスターに向けていた。
それもそうだ。何せラグナ達や周囲の人々が多彩な洋服を着ているのに対し、彼女一人だけ黒と白を基調とした修道服を着ているのだから。

「この店にいらっしゃるのは初めてですよね？」

周囲の目にラグナがうんざりしていると、茶髪のロングヘアの女性がシスター達に話しかけてくる。
「はい、そうですけど…」
「やっぱり！このお店、つい最近出来たばかりなんです。それに、修道服を着たお客さんなんて、一度来てたら忘れられませんから」
不思議そうにしていたシスターだったが、女性にそう言われ、同時にようやく周囲の視線にも気づく。
「…今の今まで黙っちゃいたが、この人が言ったから俺からも言わせてもらうけどよ――アンタ、俺達にはお洒落しろとか言っときながら、自分はそのままって、一体どーゆーことだよ」
ラグナもその女性店員に便乗する形で小言を溢すと、シスターは困ったような笑みを浮かべた。
「あ、アハハ…実は――教会（あそこ）に住みはじめてから、街に来たことがなかったの。食料は教会の裏にある森の中で採れたものとか、畑で栽培した分で十分足りてたし…何度か降りようとしたこともあったけど、『お姉ちゃん達』が心配だからって代わりに行ってくれたりして…それでクローゼットに残ってたの、学生時代の制服か、この修道服のスペアだけだったんだよね」
修道服で来た理由を話して苦笑いをするシスターに、ラグナはつい

ため息を溢してしまう。
　そんな二人を見て、女性が可笑しそうに笑った。
「すみません。お二人のやり取りが微笑ましかったものだから、つい…そういえば、自己紹介がまだでしたね。――私はこの喫茶店『翠屋』のパティシエ兼店長代理を勤めさせていただいてる『高町桃子』といいます」
　そう言って、桃子と名乗った女性が礼儀よく頭を下げると、シスターが慌てて立ち上がり、同じように礼をする。
「ご丁寧にありがとうございます！私はすぐそこの教会に住んでる『セリカ＝Ａ＝マーキュリー』です。この子達は、その教会で私が育てる養子さんで、名前は『ラグナ』、『ジン』、『ラムダ』、『サヤ』、『ニュー』っていいます」
　頭を上げたシスターがラグナ達を順に紹介し、それぞれが桃子に頭を下げていると、桃子の側に彼女と同じ髪色の少女が歩み寄ってきた。
「お母さん。これ、テーブル席１番さんのオーダーだよ」
　少女がオーダーシートを挟んだクリップボードを差し出すと、桃子はそれを受け取り少女の頭を優しく撫でる。
「ありがとう、『なのは』」
「エへへ…」
「――もしかしてその子、高町さんの娘さんですか？」
「ええ、そうですよ。なのは、ご挨拶できる？」
　桃子が『なのは』と呼ばれた少女に問いかけると、少女は元気よく頷き、桃子の横に並ぶようにして前に出る。
「高町なのは、４歳です！」
　少女――『高町なのは』が、簡素な自己紹介をして頭を下げると、ピンクのリボンで束ねられた茶髪のピッグテールが揺れる。
「なのはちゃんっていうんだ！ジンと同い年なのに、もうお母さんのお手伝いをしてるなんて、よく頑張ってるね！えらいえらい♪」
　礼儀正しいなのはを見て、感心したシスターが頭を撫でてあげると、なのはは満更でもない表情を浮かべる。

「なのはちゃんって一人っ子なんですか？」
「いえ、なのはは次女なんです。上に二人、長男と長女がいて、長女の『美由希』は小学六年生、長男の『恭也』が中学二年生なんですよ」
なのはの頭を撫でながら質問したシスターは、桃子の返答を聞いて心底驚いた顔をした。
それはラグナも同じで、信じられないものを見たような顔をしている。
「ええ!?高町さん、若そうなのにお子さんが三人もいるんですか!?」
「フフッ…『高町さん』なんて堅苦しい呼び方じゃなくて、名前で呼んでいただいて構いませんよ。私も『セリカさん』と呼ばせてもらいますから。それにセリカさんこそ、私よりまだ断然お若いのに、五人も子育てをしてるなんて――立派じゃないですか」
桃子が微笑みながらシスターのことを誉める中、ラグナは目の前の女性が三人の子持ちという事実の衝撃が強すぎたのか完全に上の空となっていた。

ちなみに、後のラグナはこのときの会話を振り返り、こう語ったと言われている。

『俺って前世じゃ、義務教育なんてモンは全くと言っていいほど受けてなくてさ…後から知ったことなんだけどよ――中二って、だいたい

１４歳ぐらいだろ？そんで”あの人”――モモコは、ナノハから聞いた話じゃ、あの時まだ２８歳だったっていうじゃねぇか。もしそれが本当だったなら、妊娠期間からも考えて、モモコはキョウヤを１３歳の時に身籠ったっつーことに――いや、やめとくわ。これ以上勘繰ったら、なんかヤベー気がする…』

「兄さん？」

「――ハッ！」

一瞬、未来からの電波を受信しかけていたラグナだったが、隣に座っていたジンが心配して話しかけたことにより、どうにか気を取り戻した。

なお、彼が電波を受信している間に、シスターと桃子の二人の間で話が進んでいたらしく…

「本来なら、私は経理担当なんだけど、この店の店長で私の夫の『士郎』さんが今、別の仕事で海外を飛び回ってて…」

「それじゃあ、この翠屋は親子で経営してるんですね！」

「ええ、そういうことになるわね。でも、まだ出来てすぐだからそこまで名前は売れてないし、休日とか学校が終わった後とかは恭也と美由希も手伝ってはくれてるけれど、人手が足りないのよね――それに本当は、今日はなのはに手伝ってもらうはずじゃなかったんだけど、アルバイトの子が急に体調を崩して来れなくなっちゃって…」

シスターからは余所余所しい雰囲気が消え、桃子にいたっては少し

砕けた口調で話しており、見るからにすっかり仲良くなっていた。
その光景にどこか微笑ましく思っていたラグナだったが、すぐに自分の側にいる者達の異変に気づく。
ジン・サヤ・ニューの三人は明らかに不満そうな顔を浮かべ、ラムダは表情からは読み取れないが彼女の纏っているオーラが不満さを物語っており、なのはにおいては、オーダーを忘れて話に耽る母に物珍しそうな、それでいて困った顔をしていた。
「シスター、そこまでだ。ニュー達が待ちくたびれちまってる」
「え？――あ！ご、ごめん！」
ラグナの声に、一瞬気の抜けた顔をした二人はすぐに我に返ると、シスターはすぐ隣で不満げにうつむくニューに謝り、桃子は誤魔化すように一度、咳払いをする。
「ご注文はお決まりでしょうか？」
そしてすぐに営業スマイルへと切り替（シフトする）えると、何事もなかったように注文を尋ねてきた。
「えっと…皆、どれにするか決まった？」
改めて、シスターが子供達にそう尋ねる。すると――
「――あっ」
一人、間抜けな声をこぼした者がいた。――今の今まで、まともにメニュー表を見ていなかったラグナだ。
「あー、すまねぇ。俺が決まってねぇわ」
「兄さま！」
「悪（わり）い悪（わり）い。すぐに決めるから、もう少しだけ待ってくれ」
膨れるサヤ達に頭を下げたラグナは慌ててメニュー表を見ると、どれを頼むか考え始めた。